親知らず

達三

親知らず

中央公論社

913　　057885

○ 本は大切に扱いましょう。
○ 借りた本は責任を持つて保管しましょう。
○ 返済期日は必ず守りましょう。

埼玉県立図書館
移動図書館
浦和市高砂町3の73
電話(浦和)2314

目次

親知らず　三
交替期　一六七
手切れ　一九一
二十八歳の魔女　二一五
遺風　二三三

裝幀　高久廣

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

親知らず

1

最初の妻は、結婚して三年目に腸チフスで死んだ。康信は二十九歳だつた。子供はなかつた。さかのぼつて考へれば、そのことか不幸のはじまりであつたかも知れない。

それから四年ばかり經つて、彼は二度目の妻をむかへた。十歳も年のちがふ、若い妻であつた。世間馴れない、打算といふことのまるで出來ない、情緒のうつくしい女であつたが、彼女にも子供はなかつた。そのこともまた不幸の原因であつたに違ひない。もし彼女に子供があつたならば、康信はそれから後は妻をめとらうとは考へなかつたであらう。彼は子供をほしがつてゐたが、妻は醫者の診察をうけることを嫌つて、たうとう子供のないままに生涯を終つた。

彼女が死んだとき、康信はもう五十を過ぎてゐた。製紙會社の部長をしてゐたので收入も相當あり、生活も自然派手であつた。したがつて家庭に妻がゐないのは、たちまち困ることだつた。翌年、彼は三度目の結婚をした。

恆子は初婚ではなかつた。彼女は貧しい家庭に生れた女で、小學校だけしか出てゐなかつた。若いときは病院の看護婦をしてゐた。それから或る大きな邸に住み込んで、八十ちかい老人に付きそひ、看護婦を兼ねた女中奉公を四年ばかり續けた。したがつて多少は醫學上の知識ももつてゐた。

三十をすぎてから、町の藥局の主人と結婚して五年を過したが、子供はうまれなかつた。この事もまた不幸の原因に數へられるかも知れない。彼女に子供があつたならば、良人の死後もやはり藥局をまもつて、子供の養育をすることになつたに違ひないのだ。子供のない恆子は、良人に死なれたとき、まだ三十六であつた。實家は信州の農家であつた。一年ばかり實家ですごしてゐる間に、婚家の籍をぬき、それから東京に出て、個人經營の病院で看護婦長の職についた。

彼女が人にすすめられて、康信の三度目の妻として嫁いたとき、彼女はまた四十まへであり良人はもう五十三であつた。

翌年、恒子ははじめて子供を產んだ。康信にとつても、二十數年の望みかかなへられたわけであつた。そしてその翌年、彼女は二度目の子を產んだ。親たちにとつてはこの上もない幸福がやつて來たやうに思はれた。しかし本當の不幸はこの事から始まつたのだつた。政子は父が五十四歳の子であり、治子は五十五歳の子であつた。そして治子が生れた年に、康信は停年制によつて會社を退いた。またからだは健康で、いくらでも働けるやうでありながら、社會は彼を老朽者として扱つてゐた。その老朽者が、やうやく子供を得たのだつた。

この親と、この子との間には、一つの世代が抜けてゐた。つまり康信は祖父であるべき年齡でありながら、やつと父になつたばかりであつた。子供たちにとつては、父が居なくて祖父が居るといふ風なかたちであつた。一つの世代が抜けてゐるといふことは、親と子とのあひだに、それだけ大きな年代のへだたりがあるといふことだつた。半世紀[illegible]へだたりは、年齡のひらきと云ふよりは、殆んど人種の差のやうなものであつた。子供たち[illegible]まだ父に抱かれて育て

られてゐるあひだは、そのへだたりはどこにも見えては居なかつた。從つて父も母も、安心して子供たちを育てることが出來た。一つの世代がぬけてゐることの恐るべき不幸に、氣がついてはゐなかつたのだ。

停年で會社をしりぞいても、康信はかなりの株券をもつてゐた。その配當收入で一家は安全に暮して行くことができた。しかし、やがて戰爭末期の困難な時代がやつて來た。製紙會社は原料や藥品のきびしい統制をうけ、經營が成り立たなくなり、ほとんど潰滅と同じやうなかたちで大會社に合併された。それと同時に康信は持ち株を處分してしまつた。

康信は老齡になるとともに寒さを嫌つて、戰爭のきびしくなつた十八年の冬から、小田原市外の閑靜な山ぎはに一戶をかまへて引き移つてゐた。したがつて彼等は戰爭による災害は全くうけてはゐなかつた。しかし戰後のインフレーションの打擊はやはり大きかつた。

彼は戰後の經濟の動きを見て、貯金といふものの價値が危ふくなつて來たことを感ずると、早速その貯金をもつて三軒ばかりの小さな借家を建てた。それは賢明なやり方たつた。銀行預金は封鎖をうけ、貨幣の價値が百分の一にも下落した時期を、何とか凌いで來られたのは、彼

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

の計畫が的中したからであつた。

子供たちは親の苦勞も知らず、戰爭のおそろしさも直接には知らされることなしに、成長してゐた。戰爭の終つた時には、二人とも小學校に通つてゐた。彼女等の母は、學問といふことに異常な熱意をもつてゐた。恆子は小學校たけしか出てゐなかつたので、子供たちはどうしても大學へ行かせてやりたいと望んでゐた。

「わたしは學問がなかつたために、どれほど口惜しい思ひをして來たか知れません。私の子供たちは、どんなことがあつても學問をさせてやります。私と同じやうな辛い思ひを味はせたくありませんからね」

それは恆子の口ぐせであつた。學問に關することならば、どれだけの犧牲をも覺悟してゐた。子供たちの將來の學資に困らないやうに、五年も七年も先のことのために、今から着るものも食べるものも節約して置かうといふほどの、はげしい熱意を見せてゐた。

さし當り、生活に困つてはゐなかつたけれども、恆子は數匹の山羊を飼つて多少の收入をはかり、らふけつ染めの手內職もやつてゐた。山羊は二人の姉妹に飼育の仕事をまかせられてゐ

た。數匹の牝は年ごとに二、三匹の子を產み、その子と山羊の乳とは、求める人に賣られて、姉妹の學資として貯金された。

政子が中學校を終へて、小田原の高等學校にすすんだ時には、康信はもう七十にもなつてゐた。もともと丈夫なのではあつたが、七十年の老いは全身にあらはれて、もう永い餘生があらうとは思はれなかつた。政子が大學を出るまでにはまた七年もある。治子は八年經たなくては卒業しない。それまで生きてゐることが、もう彼には辛さうに見えた。

母はまだ六十歲であつたから、康信を叱咤するやうな調子で、はげましてゐた。

「あなたはまだ弱り込んだら駄目ですよ。子供たちが小さいんですからね。まだまだ生きて、見てやらなくちやなりませんよ。あの子たちが大學を出るまでは、私たちは死なれやしませんよ」

若い兩親にとつては、子供が大學へ行くといふことは、經濟的な負擔能力さへあれば、何でもないことであるが、この二人にとつては經濟的な苦しさとは別に、命の危險があつた。康信はもはや、子供の命に縛られて辛うじて生きてゐるやうな有樣であつた。一つの世代か拔けて

ゐることの悲劇は、先づその父親にあらはれて來たのだつた。

2

姉娘の政子は、一つのことを考へだすと、いつまでもそれにこだはつてゐる性質だつた。本を讀みはじめると食事も忘れるし、編み物に興味をもつと夜中の一時すぎまで編んでゐるといふ風な、熱中するたちの娘だつた。高等學校の入學試驗をうける前には、一ヶ月あまりも徹夜にちかいほどの勉强をして、良い成績で合格した。

母は政子の熱心な勉强ぶりに滿足してゐた。しかし勉强のことばかりを氣にしてゐて、政子のもつてゐるその他の性格については、案外に氣がついてゐなかつた。政子は孤獨な娘だつた。その孤獨さが、勉强に熱中する原因であつたかも知れない。

彼女は父にも母にも、心からの深いつながりをもつてはゐないやうだつた。父も母も、年齡的にあまりに遠かつた。兩親を遠く感じたことこそ、彼女の孤獨の一番大きな原因ではなかつたらうか。それは政子自身も氣のついてゐないことであつたし、たとひ氣がついてゐても、口

にすることのむつかしいはなしであつた。

妹の治子の方は、どちらかといふと勉強のきらひなたちたつた。彼女は高校を受けるときでも特別に勉強するやうな素振りは見えず、母に激勵されるとしぶしぶ机に向ふといふ風であつた。彼女は辛うじて高校に入學したが、そのことを喜ぶやうな樣子もなかつた。

犬や猫を可愛がる娘だつた。飼つてゐる山羊は殆んど治子がひとりで世話をした。山羊が仔をうむのを一番喜んだのは治子だつた。彼女は飼つてゐる牝山羊に季節がめぐつてくると、自分で綱を曳いて、牡山羊を飼つてゐる家に種つけに連れて行つた。若い娘の情感に微妙な反應をもたらすに違ひないさういふことに關して、恆子夫人は全く何の用意もなく、警戒心もなかつた。それは彼女がむかし看護婦をしてゐたために、人間の肉體といふことについて鈍感になつてゐたのかも知れなかつた。彼女は學問もなく、高い教養も乏しかつた。子供に學問をさづけるといふことについては非常な熱意をもつてゐたが、學問といふことの考へ方は、功利的だつた。學問さへあれば偉くなれるとか、肩身がひろいとか、お金がまうかるとか、さういふ考へ方をしてゐた。從つて娘たちの精神の成長とか女性的な教養とかいふことに關しては、何の

方針ももつてはゐないのだつた。

さういふ點は、帝大を卒業してゐる父が、娘たちの指導をするべきであつた。しかし康信は財界人であり、財界の仕事に終始した人であつて、文化的な素養はあまりゆたかでなかつた。五十以上も年のちがふ若い娘たちの、微細な心の動きを理解してやることも出來なかつたし、娘たちの精神的な成長を指導するといふやうな能力にも缺けてゐた。そして何よりも、もう老齢であつた。心の動きも怠惰になつてをり、子供たちと正面から向きあつて、一つのことを語りあふといふやうな精神の活氣を失つてゐた。

政子が高校二年のとき、康信は重い神經痛をわづらつて、三ヶ月ばかり床のなかで唸りつづけてゐた。それが治つてからも、足が急に弱つて、街へ散歩に出ることも不自由になつてしまつた。命數の盡きるときかいよいよ近づいたといふことは、誰の眼にも明らかであつた。しかし彼は死ねないのだつた。

「あの子たちが大學を出るまでは、私たちは死なれやしませんよ」と恆子は言ひ言ひした。

父はそれに對して、何とも答へはしなかつたが、そんな年になつて、痩せおとろへてしまつ

てゐるのに、まだ子供たちを育てるといふ重い負擔を負はされてゐることが、いかにも哀れだつた。恆子はさういふ良人の哀れさを、感ずることの出來ない女だつた。

彼女はただひたすらに、二人の娘が無事に大學を出ることばかりを願つてゐた。山羊やらふけつ染の內職で得られる收入は、少々のものに過ぎなかつた。三軒の小さな貸家からはいる家賃が、一家の生計の大部分であつた。從つて、二人の娘を大學へやることは、どう考へても無理であつた。康信の病氣で、現金の貯へも減つてゐた。しかし恆子はすこしも考へを變へようとはしなかつた。

彼女の强い意志にはげまされて、政子も治子も高等學校へ通つてゐた。そして彼女等の成長は、とりも直さず經濟的に親たちを追ひつめることであつた。大學の授業料をどこから捻出すればいいのか、娘たちには見當もつかなかつたが、恆子はただ、

「大丈夫よ。どんなことをしたつて、三年や四年、やつて行けないことは無いわ」と言つてゐた。

親たちがまだ四十五十の働きざかりであれば、子供は自分の成長をみづから喜ふことが出來

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook